

「カマは燃えているー ココ〈ボール〉ルームでなりたい自分になる」をより楽しむために

本日は、「カマは燃えているー ココ〈ボール〉ルームでなりたい自分になる」（通称：カマボール）をご覧いただき、ありがとうございます。このイベントは、大阪大学の大学院生でもあるなぎ〜（松本渚）を実行委員長として、大阪大学COデザインセンターの教員ほかで構成される「カマは燃えている実行委員会」が主催し、COデザインセンターの教育プログラムの一環として行われる企画です。

この企画は、1980年代のNY、ハーレム地区のボールルームカルチャーに触発されて始まった企画であり、80年代のハーレムのボールルームカルチャーを、2021年の釜ヶ崎において再解釈してパフォーマンス、ということの一つの企画趣旨としています。ここでは、企画の背景となっているボールルームカルチャーや釜ヶ崎という場所、実行委員会が考えるこの企画の意味についての簡単な紹介をします。

### ●NY、ハーレム地区のボールルームカルチャーとは

ボールルームカルチャーとは、周縁化されたさまざまな性的指向とジェンダー・アイデンティティ（SOGI）を持つ人たちがつどって開いていたボール（ball＝舞踏会）のなかで育まれた。特にハーレム地区のボールの特徴は、アフリカ系、ラテン系のSOGI非典型のひとたちが集い、異性装（ドラッグ）だけでなく、カレッジボーイや白人のセレブリティ、えらい軍人さんなど、人種差別、ホモフォビアなどさまざまな差別や抑圧にさらされた彼らが、なりたくてもなれない格好をして練り歩き、「本物らしさ」（Realness）を競う、ということが行われていた点にある。

このNY、ハーレム地区のボールルームカルチャーの様子は、1990年にジェニー・リヴィングストン監督によって制作されたドキュメンタリー映画“Paris is burning”（邦題『パリ、夜は眠らない』）によって記録されている。

ボールルームでも、ドラッグとよばれる異性装は行われていたが、現在知られるドラッグ・クイーンは、1980年代～90年代のクラブカルチャーと混じり合うなかで、パフォーマンスとして確立され、ショー化、アート化されたものである。ハーレムのボールルームカルチャーは、下で述べる「ハウス」の存在からもわかるように、クラブシーンやショーパフォーマンスとは一線を画し、ハーレムに暮らす有色人種のSOGI非典型のひとたちの地域コミュニティ、生き延びるための支えあいの場としての機能を持っていた。また、ハーレムのボールにおけるドラッグは、トランスジェンダーによってもなされており、ドラッグの典型として知られる「ゲイ男性による、女であることをパロディ化したパフォーマンス」だけでなく、その姿でリアルに生きていく（パス＝通用する）という彼らの願いの表現でもあった。

### ●ハウスとは

ハーレムのボールルームでは、生物学的な家族からはなれたり、追い出されたりして行き場のないアフリカ系、ラテン系のSOGI非典型の若者たちに、マザー、ファーザーと呼ばれる先達が、住む場所を提供し身の回りの世話をすることが行われていた。マザー、ファーザーを中心とする疑似家族のような集団は「ハウス」と呼ばれていた。

この「ハウス」というある種ケア的な、オルタナティブな家族としての結びつきは、ブラックカルチャーにおける母系社会的コミュニティのありかたに由来するところが多い。加えて、セクシャリティと人種との二重のマイノリティであり、貧困や孤立、HIV感染のリスク・恐怖（1980～90年代のアメリカは、HIVの感染者が急増したいわゆる“エイズ・パニック”の時代）などに晒されていたハーレムのセクシャルマイノリティたちが、次の世代（チルドレン）に生き延びるための道を示すための結びつきであったとも言える。ハウスという集団は「ゲイのストリートギャング」のようなものでもあったが、ただし、ハウスのメンバーは、路上で喧嘩をし、暴力を振るうのではなく、ボールのなかでそれ「らしさ」を競い合うダンスや衣装で対決をしていた。

## 参考文献

魚住洋一「There's No Place Like Home—ドラッグ・クイーンと『ホーム』の政治」、電子ジャーナル『倫理学論究』vol.5, no. 1、関西大学倫理学研究会、2018年。

Marlon M. Baily, *Butch Queens Up In Pumps: Gender, Performance, and Ballroom Culture in Detroit*, The University of Michigan Press, 2013.,

## ●釜ヶ崎という街

大阪、西成にある釜ヶ崎（あいりん地区）と呼ばれる地域には、高度経済成長期の70年代に全国から単身の日雇い労働者が集められ、彼らが寝泊まりするための簡易宿所（ドヤ）が多く開かれた。釜ヶ崎は日雇い労働者の街、ドヤ街として知られるが、それ以前から、社会のなかで周縁化された人々が流れ着き、暮らす場所でもあった。花街飛田の周辺には同性愛者や女装をする男性も多く暮らし、男娼やバーで働いていたという。釜ヶ崎という地名の由来を、この街に「おかまさん」が多く住んでいたことにちなんだ「カマが先」からきているという説明する人もいるほどである。

また、バブル期やリーマンショックを契機に、日雇い労働者たちの仕事が激減、路上生活を選ばざるをえない人や生活保護を受けて暮らしを成り立たせる人が増えた。また現在の釜ヶ崎は、高齢化が進み、日雇い労働をしていた単身男性だけでなく、何らかの事情で家庭や故郷を離れ、この街に流れ着いた人々や、海外から来た人や障害を持つ人など、さまざまな人たちが暮らしている。

## 参考文献

鹿野由行・石田仁「戦後釜ヶ崎の周縁的セクシュアリティ」、『薔薇窓』通巻第26号、2015年。

『労務者渡世』第14号、特集：おかま、労務者渡世編集委員会発行、発行年度不明。

## ●2021年の釜ヶ崎とボールルームカルチャーとのつながり

釜ヶ崎は、ホームをはなれたひとたちの街であり、支えあいの文化がつつかわれている。そして、土地の歴史的経緯もあって、さまざまな性的指向やジェンダー・アイデンティティを持つひとたちが暮らしている。差別や抑圧、貧困のなかで生きのびるために、表現活動を通じたつながり、コミュニティを作り出していたボールルームカルチャーとの接点について、実行委員会は、釜ヶ崎にあるさまざまなつながりの場、そこに集う人々と交流をふかめつつ、探っていった。

現在の釜ヶ崎は、高齢の単身者の多い街であるがゆえに、彼らが支えあい、生き延び、互いを看取るためのさまざまな結びつきもまた存在する。ただし、釜ヶ崎における「ハウス」とは、マザーやファーザーがケアする疑似家族というより、単身者（家族・家庭を持たざるものたち）の相互扶助の支えあいであると言えるかもしれない。今回の出場者も、紙芝居劇団「むすび」やHIVカフェ（ロカボを食べながらHIVについて知る会）の仲間がきっかけとなってこの地域に暮らすことになった人や、支援ハウス路木で老老介護のようなかたちで支えあって暮らしている人、ゲストハウス（とカフェと庭）ココルームに集う人々など、さまざまな釜ヶ崎流のハウスに縁を持つ人が多い。

また、住民の背景は多様化し、さまざまな人が、それぞれの経緯からこの土地に縁を持ち暮らしている。メインパフォーマーのみなさんも、それぞれに苦難、喪失、屈折、病気や障害、差別や排除を経験されており、それぞれのしかたでそれを生きのびて暮らしている。それぞれの人にとって、「なりたい格好」とは、輝いていた時代・自分への思慕、このように生きていきたいという願いの表現、囚われから解放されるための手段、死ぬ前に一度はしてみたい格好など、様々な意味を持っている。いわゆる異性装で登場する出場者の方についても、典型的なドラッグクイーンの様倣や単一のジェンダー、ジェンダーアイデンティティ、セクシャリティの表現にはおさまりきらず、その表現に込められた思いや意味はそれぞれの方で異なっている。ボールルームカルチャーは、すでにあったドラッグカルチャーをたくみに取り入れつつ、じつに多様な「ジェンダーシステム」（M.Baily 2013）を練り上げ、女装・男装におさまりきらない、自由で解放的な自己の表現を追求していた。カマボールでは、様式化されて

いるドラッグショーをなぞるよりも、それをじぶんたちの文化へと変換していったボールルームカルチャーの精神を尊重し、いまここでわたしたちができることに挑戦することにした。

このイベントを通じて、2021年に釜ヶ崎で暮らす人々の、ささやかだけれど大切な、それぞれの人の多様なサバイバル（生存）のあり方や、彼らの生存を支えるつながり（釜ヶ崎流「ハウス」）について、それぞれのパフォーマンスを通じて感じとっていただければ、幸いである。

### ● 「おかま」という表現をめぐる

カマボールでは、これまで日本で差別的な文脈でつかわれてきた歴史のある「おかま」という表現をもちいる。「おかま」ということばが差別的であるかどうかについては、いわゆる当事者のあいだでも意見がわかれる。出演者のなかには、「おかま」をみずからの表現として積極的に用いるひともいるし、「おかま」ときいて過去のつらい経験をおもいおこすひともいる。かつて、釜ヶ崎周辺で「男娼」とよばれていたセックスワーカーたちは、「おかまさん」として労働者たちに親しまれてもいた。「おかま」とよばれてきたひとたちはさまざまであり、ゲイ男性なのかトランス女性なのかという今日知られる用語で単純には区別できない。逆にいえば、「おかま」は固定的なアイデンティティというよりは、流動的で移行的な存在をいいあらわしてきた歴史的なことばであり、英語圏の“queer”ということばがもつ規範への不服従や多様性の肯定にちかいニュアンスをもつといえるだろう。

「おかまはおかまでええやないか／そやな／うん／ほんならそいでいこ」（はせさん作詞の歌詞より）

参考文献：

伏見憲明・及川健二・野口勝三・松沢呉一・黒川宣之・山中登志子『「オカマ」は差別か』2002年、ポット出版

### 【出演者】

メインパフォーマー：

かずおちゃん

消しゴムさん

たけちゃん

そがっち（そうちゃん）

ゆうちゃん

はせさん（featuring はるさん from むすび）

ココルームのゲストたち：

高木ちえこさん

Cherry Bombさん

ユキさん

### 【ゲスト審査員（お褒めのコメント、セレブレーション担当）】

ヴィヴィアン佐藤（美術家・ドラッグクイーン）

上田假奈代（詩人）

田中均（美学者・大阪大学文学研究科・准教授）

### 【スタッフ】

カマは燃えている実行委員会：

松本 渚 a.k.a.なぎ〜（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程／実行委員長）

ほんまなほ（大阪大学COデザインセンター・教授）

高橋 綾 a.k.a.ハカセ（大阪大学COデザインセンター・特任講師）

小泉 朝未

演出・振り付け  
富塚絵美

衣装・メイク指導  
ヴィヴィアン佐藤

音楽  
ほんま なほ（編曲・作曲・歌・三線）  
菊竹智之（ギター演奏）

音響  
金里馬

撮影・記録・配信  
重江良樹（映画監督・galafilm）とカメラクルー

運営補助：  
西脇知里  
刀禰静  
神谷千織

【協力者】

ココルームスタッフ  
高橋亘さん、湯川さん  
ココルームレジデンスゲストの協力者  
テングョウ・さん、音惟さん、小林さん  
かまぷ～：  
まちこさん、しょうゆさん

小道具制作協力：  
丑田拓麻さん（そうちゃんの車）、高木ちえこさん（湯川さんの牡蠣）

釜ヶ崎についての知識、資料提供：  
水野阿修羅さん

オープニングテーマ「おかま人生」作詞/作曲/歌 長谷康雄、アレンジ・リミックス ほんまなほ  
エンディングテーマ「釜ヶ崎ブルース」作詞/作曲 長谷康雄、歌/アレンジ・リミックス ほんまなほ

作成・文責：カマは燃えている実行委員会